



キムチを売る女 (芒種<망종>)/GRAIN IN EAR)

2007(平成19)年8月30日鑑賞(東宝東和試写室)

監督・脚本=チャン・リュル/出演=リュ・ヒョンヒ/キム・パク/ジュ・グァンヒョン/ワン・トンフイ (ドンスン・アートセンター配給/2005年韓国、中国合作映画/109分)

……台湾の蔡明亮^{ツイ・ミンリヤン}、韓国のキム・ギドク、中国の賈樟柯^{ジャ・ジャンクー}のライン上にある(?)、知られざる朝鮮族の映画作家チャン・リュルに大注目! 中国北部の不毛の地を舞台として、キムチを売る母と息子の生活は、なぜ否応なく絶望的な状況へ……? そして訪れてくる衝撃的な結末は……? しゃべりすぎないこと、見せずさないこと、そしてそれによって観客に考えさせること、それがアート映画の特徴であることを痛感! 是非、日本でも大ヒットしてほしいものだが……。

映画作家なるものとは……?

商業映画・娯楽映画に対して、芸術映画・アート映画という違う範疇がある。また、映画監督に対して映画作家という違う言葉がある。目下、東アジアを代表する映画作家は、台湾の蔡明亮^{ツイ・ミンリヤン}、韓国のキム・ギドク、日本の北野武、中国の賈樟柯^{ジャ・ジャンクー}といったところ……。

今そこに、1962年に中国で生まれた在中3世の朝鮮族出身者で、現代の中国文学を代表する作家としても有名なチャン・リュルが加わったらしい。そして、彼の映画作家としての第2作目となる最新作が発表された。それが『キムチを売る女』。

この作品は、2005年カンヌ国際映画祭批評家週間 ACID 賞をはじめ、2005~06年にかけて世界の映画祭で15もの賞を受賞したとのこと。そのチラシを見る限り、主人公(ヒロイン)の「キムチを売る女」はかなりいい女。そして、その息子らしい、いがぐり坊主の男の子は7、8歳というところ。さあ、未来の巨匠と絶賛されているそん

な映画作家がつくり出す映像はどんなもの……？ 大いに期待したいものだが……？

映画は、スクリーン上で観客に考えさせる芸術

私は最近めっきり民放のニュース番組を見なくなった。特に朝のニュースにおける、ワイワイガヤガヤのアナウンサーと、したり顔でもっともらしいコメントをくり出すキャスターを勢ぞろいさせたニュース番組は、やかましいばかりの雑音と感ずるようになってきた。したがって、朝のニュースはもっぱらNHKばかりに偏っているし、夜の『報道ステーション』では、ニュースの報道が終わり古舘キャスターの顔が画面に登場すると、他のチャンネルに切り替えてしまうという状態。

そして、それと同じ現象が映画にもあることが、キム・ギドク作品やこの『キムチを売る女』を観ればよくわかる。つまり、映像とセリフそしてナレーションによって、「彼は彼女を愛しています。今その思いを打ち明けています。さあ、続いてベッドの上ではどんなテクニックを使うのでしょうか……」などと実況中継されたのでは、観客は映画を観ながら考える必要が全くなくなるし、半分居眠りしていても大筋を理解できることになってしまう。しかし、キム・ギドクの作品はそうではない。全編セリフなしの『うつせみ』(04年)をはじめ極端にセリフの少ない彼の作品では、観客がきちんとスクリーンに集中していなければ、話の展開が全くわからない。また、映画作家の作品は概して手取り足取り説明してくれず、「お前の頭で考えろ！」と突き放すような意地悪なつくり方(?)が多いから、必死に頭を回転させなければサッパリわからないまま……？

そんな風に考えると、テレビのニュース番組は淡々と事実を伝え、ダイニングやリビングに座っている私たちの方から「おっ、こんなニュースをやってるぞ」と注意を向けさせるくらいでなければダメ。そして映画だって、お金を払って座席に座っている観客をスクリーンに注視させ、集中させなければダメ。まさに、映画はスクリーン上で観客に考えさせる芸術なのだ。

舞台は中国北部

現在の中国(中華人民共和国)は23の省と5つの自治区から成り立っているが、1932年の「満州国」建国を中心として、日中戦争の舞台の1つとなったのが中国の東北地方。そこにある省は、①大連、瀋陽(かつての奉天)のある遼寧省、②その北

の、長春のある吉林省、そして③さらにその北ハルビンのある黒龍江省の3つの省。また、そのすぐ西側にあるのが内蒙古自治区であり、さらにその西は横綱朝青龍が8月29日に帰国してしまったモンゴル共和国。

遼寧省の大連は今や中国屈指の近代都市だが、清国の初代皇帝となった太祖ヌルハチの故宮のある瀋陽はかなり田舎……？ そして、吉林省、黒龍江省は東を豆満江を挟んで北朝鮮に接しているため、北朝鮮からの「脱北者」の多い問題の省。

この映画の舞台は中国の東北地方と設定されているだけで、舞台となる省とまち(村)は特定されていないが、ヒロインであるスンヒの住んでいる、人通りの少ない寂しいまち、不毛の地(?)を見れば、それだけで生きていくことの厳しさを実感できるもの。

日中戦争の歴史はもちろん、中国東北部の地理もロクロク知らない多くの日本人は、この映画を観るにあたって、まずはそんな地理の勉強をしっかりと……。そのうえで、次に「朝鮮族」という民族の位置づけのお勉強も……。

朝鮮族は五族の1つ

日中戦争時代の日本陸軍の合言葉は、「満蒙は日本の生命線」であり、「大東亜共栄圏」を目指す大日本帝国のスローガンは「五族協和」だった。この五族とは、日本民族、漢族、満州族、蒙古族、朝鮮族の5つ。「大東亜共栄圏」も「五族協和」も、白人支配に対抗する黄色人種総体としては立派な理念であり、すばらしい理想だったと私は思っているが、問題はその実態。帝国主義、植民地支配を貫こうとする白色人種からの解放を目指した黄色人種の盟主としての日本(民族)は、実態としては残念ながら白色人種と手を結びつつ、「大東亜共栄圏」「五族協和」の美名の下に、漢族、満州族、蒙古族、朝鮮族への抑圧を強めていったというのが、日中戦争の歴史……？

他方、現在の中国は漢族が94%で、少数民族は6%とのこと。蒙古族はモンゴル共和国の建国によって問題は少ないよう。また、雲南省に多いペー族、ハニ族、ナシ族などの本当の少数民族は手厚く保護されているよう。しかし、チベット自治区のチベット族は、漢民族の進出によって大変な状況にあるみたい……。そしてまた、朝鮮戦争後の南北分断のため、北朝鮮からの脱北者はもとより、もともと中国東北部に住む朝鮮族はそんな時代状況の中、生きていだけで大変なのは当然……。

ヒロインの氏素性とその生計は……？

この映画は、キムチを売る女チェ・スンヒ（リュ・ヒョンヒ）の日常を追うだけのドキュメンタリー映画ではなく、スリリングなストーリー性と観客に向けた強烈なメッセージ性がある。それだけでなく無口なスンヒだから、自分の氏素性や生い立ちについては詳しく語らないが、つい打ち解けた男や警察の取り調べにおいては、やむなく自分の氏素性を語ることに……。

それによれば、彼女は朝鮮族で32歳。夫がいたが、彼が犯罪に手を染めたため、息子のチャンホ（キム・パク）と共にこの地にやって来たらしい。中国北部では「キムチを売る女」は日常の風景の1つらしいが、彼女が売るキムチは、1つ（適当に取り分けて重さを計って売っているが、私が見たところでは1つ500g）当たり7元くらい。没収されてしまった彼女の大切な三輪自転車を発見し、買い戻すための料金が80元。また、息子に買ってやる風呂が定価20元、まけてもらって15元というのが、この映画で紹介される貨幣価値の状況。そして、スンヒは貧しいながらも何とか日々キムチを売って生計を立てることができているよう……。

チラシを見ればすぐにわかるように、このスンヒは息子持ちの32歳ながら、結構美人。したがって、キムチ目当てだけではなく、彼女を目当ての男が言い寄ってきても当然。そんな最初の男は……？

最初の男は、同じ朝鮮族！

スンヒに対して最初に色目を使ってきたのは、「同じ朝鮮族だろう」を口説き文句にした男キム（ジュ・グアンヒョン）。といっても、はっきりと口説き言葉を述べるわけではなく、当初は時々スンヒの前に姿を見せてキムチを買っていただけ……。彼は自動車工場の技術者らしいが、もちろん妻がいることは「告白」済み。

いつもキムチを買ってくれるうえ、同じ朝鮮族ということで食事をしたりしていると、息子と2人だけで孤独な毎日を過ごしているスンヒにとって、多少心の安らぎになったことはたしかなよう。もちろん、スンヒの心の中にそれ以上の打算やセックスへの欲があったのかもしれないが、それはあなたの解釈次第……。

毎日のようにスンヒの自宅に通ってくるキムは、遂にある日部屋の中でスンヒと……。母親のそんな姿に感づいた息子は、複雑そうな目でキムと母親を見ていたが、

さて子供心にそんな母親をどう評価していたのだろうか……？

2 番目の男は、利益誘導型……？

ある日、スンヒは大きな工場内の食堂でたくさんの従業員用の食事をつくっている男から、「俺の食堂で働かないか」という誘いを受けた。その食堂を見学してみると、そりゃ立派なもの。ここでキムチをつくって売ることになれば、収入が拡大し安定することは明らかだから、スンヒは有頂天になって喜ぶかナと思っていると、意外にも「考えてみます」という冷静なもの。それは、虐げられた生活を送ってきたスンヒは、その勧誘には何らかの利益誘導のウラ話が伴っていると直感していたから……？

すると案の定、その男はスンヒの手を握って別室へ導きながら、「少くくらは見返りがなくっちゃな」ときたもんだ……。さて、そこで示したスンヒの行動は……？

3 番目の男は、権力の見返りに……？

日本の警察官は、自分が関与している事件で直接当事者から買収されることはまず考えられないが、中国ではそれは日常茶飯事……？ 中国でも露天商をやるには免許が必要らしいが、スンヒは無免許のまま。したがって、取締りにあうと、商品はもとより、大切な三輪自転車まで没収されてしまうことに……。

そんなスンヒをかわいそうだと思った(?)若いハンサムなワン警官(ワン・トンフィ)は、彼女に免許をとらせてやったが、ひょっとしてそれも何らかの計算づく……？ そう思っていると、案の定、ワン警官もキムの妻から売春婦だと訴えられて、今警察に捕まっているスンヒの手錠を外してやる代わりに、露骨にスンヒの肉体を要求することに……。

スンヒとの浮気現場を突き止められたキムが、妻に対して白旗を掲げるのはわかるが、それまで「同じ朝鮮族だろう」を口説き文句にしていたのに、突如そこで「この女は売春婦だ！」と開き直るのは許せないもの。また権力をカサにきて、その見返りに女の肉体を要求するワン警官も許せないもの。しかし、そんな現実に対して誰にも抗議する術のないスンヒは、黙ってそんな現実を受け入れざるをえなかった。

しかし、男をめぐるこんな絶望的な状況がくり返される中、次第に形成されてきたスンヒの決心は……？

見せないのが新鮮！

かつて女性ヌードを売りモノにした週刊誌は、ヘアヌードの解禁を契機として(？)、「これでもか！ これでもか！」とその露出度を強めていったが、この手の写真は「見せればいい」というものではないのが面白いところ……？ ポルノ映画でも成人用ビデオでも、あまりそればかり観ていると飽きてくるもので、かつての日活ロマンポルノの方がよっぽど良かったと思う男性諸氏は多いはず……？

この映画では、ヒロインのスンヒをめぐる男性模様(？)が描かれ、スンヒの部屋の中でいざこトに及ぼうとする直前のキムの全裸シーンが登場する。あまり男のそんな姿は見たくもないが、ここまで見せるのなら女の方も、そして激しいベッドシーンも、と多少期待した(？)が、残念ながら(？)、この映画ではそれは全くなし。執拗なキスシーンがスクリーン上で展開されるから、その流れによれば当然その次は〇〇と誰でも予測できるのだが、映像としてはその直前でジ・エンド。これは映倫検定上の問題よりも、チャン・リユル監督の主義主張の問題だろう。すなわち、そんな露骨なシーンをスクリーン上で見せてしまったのでは、映画としての面白味がなくなってしまうという考え方……？ つまり、「見せないのが新鮮！」ということだ。

これはセックスシーンのみならず、暴力のシーンや死亡のシーンも同じ。つまり、直接それをスクリーン上で見せず、そのサマを観客に考えさせ、想像させるという手法をとっているわけだ。セックスシーンは誰でも当然に予測できるが、さて暴力や死亡のシーンは……？

売春婦はどこにでも

結構美人ながら寡黙なスンヒと対照的なのが、スンヒの隣りの部屋に住んでいる4人の若い売春婦たち。昼間スンヒが三輪自転車を停めてキムチを買いに来る客を待っていても、うらびれた不毛の地では人通りが少ない(というより、ほとんどない)から、これでホントに商売になるのかナと心配になってしまうほど……。

しかし、それでも夜になると、彼女らがネオンの中(？)で客引きをするまちには、人が行き交っているから、それなりに商売になっている様子。まさに、いくら貧乏でも、いくら不毛の地でも、売春は世界共通どこにでもある女性の職業(？)だと痛感……？ もっとも、映画の中でも少し描かれているように、彼女たちが決して楽なこ

とばかりしているのではないことは当然……。

わかりやすいワンシーン・ワンカットの手法

派手さを競うハリウッドやアクションものはスクリーン上の展開が目まぐるしいが、映画作家に共通するのが、ワンシーン・ワンカットの手法や長回しの手法。これはある意味で、ビデオカメラを持った初心者が目指す手法。すなわち、そうすれば画面がブレず一定しているから、観客はじっとスクリーンを集中して見やすくなるし、ストーリー展開や登場人物たちの気持ちをじっくりと考えることになる。ただその分派手さに欠けることになるから、どちらが好きかは人それぞれ……。

未来の巨匠と目されるチャン・リュル監督によるこの映画は、そんなワンシーン・ワンカットの手法が多いのが特徴で、わかりやすい。それがあなたの好みと合致すればいいのだが……。

救急車 その1——息子はどうなったの……？

この映画にはなぜか救急車がよく登場するが、それは一体なぜ……？ この映画の主人公はあくまでスンヒであり、息子チャンホはストーリー形成のための一要素だが、それでもそのウエイトは結構大きい。その第1は、スンヒの男性遍歴を監視する(?)息子としての立場から。第2は、単純に凧を買ってくれとせがむ子供心を表すものとして。そして第3は、貧しさゆえに母親からかまってもらえない孤独な少年が示す生きざまとして……。

そんなスンヒの息子は、悪ガキたちが落書きのために使っていたスプレーを入手したため、どうしてもそれを使ってみたくなったよう。そこで、母親が大枚15元もはたいて買ってくれた凧をそのスプレーで色付けしたが、どうもそれが自らの運を失うことに結びついてしまったよう。ある日、スンヒの前に一台の救急車が現れることになったが、それは一体何のため……？

救急車 その2——ワン警官の結婚式は……？

この映画を観ていると、人間の希望とか前向きな姿勢とかという言葉がすべてキレイゴトやインチキに思えてくる。それほど中国北部における朝鮮族の1人の女性が置かれている状況は厳しいわけだ。具体的には、スンヒはキム、食堂で働く男、ワン警

官という3人の男たちによってボロボロにされ、それまでキムチを売ることによって何とか息子と2人でひっそりと生計を立ててきた生活すら奪われてしまったわけだが、そこでスンヒは一体どんな決断を示すのが最大の注目点。

権力をカサにきてスンヒの肉体をもてあそんだワン警官は、今若く美しい花嫁を迎えようとしていた。中国では結婚式は一世一代の晴れ舞台で、今まさに大勢の友人・親族を招いて華やかな宴が開かれようとしていた。そこで、スンヒのつくるキムチのおいしさを知っているワン警官は、スンヒに対して結婚式の披露宴のために大きな桶いっぱいキムチを注文したが……。

2008年8月8日午後8時から開催される北京オリンピックを控えて、中国はその準備に大わらわだが、環境問題と食品の安全問題を中心として全世界の不安が高まっているのが実情。そんな中、中国共産党と中国政府は安全対策に大わらわ……。

日本でも、「白い恋人」をはじめとする賞味期限切れ食品が世間の注目を集めたが、ネコいらずで死んだネズミと一緒に生活しているスンヒのようなキムチ製造者が、男や人生に絶望し、やけくそになってキムチの中にそのネコいらずを入れたら一体どうなるの……？ 映画のラスト近くになって、あの華やいでいた結婚式場に何台もの救急車が駆けつけてきたのは、一体なぜ……？

スンヒの最終決断は……？

チャン・リュルが監督したこの映画は、ワンシーン・ワンカットが特徴だが、それが最後のシーンにも登場する。これは、ある意味では素人の私でも撮れるかなと思うような、スンヒが歩く姿をただひたすら後ろから追っていくショットの連続。

線路沿いにある粗末な家から飛び出したスンヒの歩行は明らかに不安定だが、彼女が今1人で行こうとしているのは一体どこ……？ 線路には列車が停まっているが、ひょっとしてスンヒは動き出す列車の前にその身を投げ出すつもり……？ そんなことを考えながら、スンヒの行動をじっとスクリーン上で観ていると……？

さあ、スンヒの最終決断は一体ナニ……？ それをじっくり考えさせるのが、チャン・リュル監督のすばらしいところだが……。

2007(平成19)年9月6日記